





東遊記卷之三

丈氏の餘風

佐々成政越中と領せし敵の圍を勢屈し
 外小味方の助けを以て我城とて守り兼し於
 一とらんとて赤松を以て一濱松の事あり
 たりといはばうらむと歎むと我んと歎むと
 方守敵の圍を以て出づと通ふし於命極月廿七
 日の事ナルに夏計日にも雪消ぬ越中五山禁
 了事まじし教文乃雪封とて一命歎えん

東遊記 卷之三

<99-1003>

る耐るをば敵も沖出さず山の方にかこみ成
改修乃を習斗と召具し、あじやう小城とて雪
深く埋りし、立山の絶頂(雪の)とてま一文字よみ
登り又絶頂より南とて谷嶺とてりて雪のよみ
よりあつた信州松本(あつた)より雪の中
え、恙なく越しと得たりとて雪の中よ立山とてま
越し、艱難中く言ふはくす、雪のよみ越し、
と成改がごとく越し、今も雪の者も成中
立山より信州松本一二日に向ふ越し、事ここを

法度の事なりとて、雪の中よ立山とてま
秘し、とて雪の道とて、雪の中よ立山とてま
六七十里も、雪の中よ立山とてま
け事、雪の中よ立山とてま
時、雪の中よ立山とてま
か、雪の中よ立山とてま
ハ、雪の中よ立山とてま
極、雪の中よ立山とてま
絶、雪の中よ立山とてま

東海道 巻之三

おも雪の上を歩かば身を換むるさふ〜又大樹喬木
 といへば雪雪の埋ま〜一面の平地の〜
 遊歴は〜穴は位をいへんと云ふ〜
 今に橋へ懸いて今今今今谷嶺池川乃
 馬車に懸え〜
 夕陽〜あけのち〜かぬま〜兵背物決の中
 小づ流〜く橋〜
 下見〜に〜山乃〜初〜
 と思ひ惜りぬ津野領は〜森〜の南は〜

甲田山といつる高山ありを歩か参差〜
 山と云つてもふつと〜高山は津野領
 の人勇を〜
 津野領の関所も津野領に〜
 二月三月の終まり〜甲田山乃絶頂は〜
 雪は〜一文の〜
 の〜志〜
 了〜

里七十里或ハ百里も餘りテ西戎西戎終つ一日二日のるに
新甘新甘なりけ外外は濱濱遠遠解解田田遠遠田田なり
も今今別別二二るを遠遠宮宮中中少少を其其北北山山成成然然て之之を
くく新新一一里二里五里七里の程程ありき
一一里一がくのでく雪雪の成成城城くを乃乃くも
一一里一ハ皆皆新新樹樹或或ハ無無原原ふや生生ひなりを多多
くく北北地地數十丈十丈乃乃雪雪積積りけは雪雪の
ふきハ雪雪皆皆積積るく氷氷く甚甚堅堅くいふいふ踏踏も
入入く南南回回七七雪雪の積積子子く大大ま遠遠い

もの多多中中は故故城城は控控りて六六倍倍トくは
先先祖祖正正宗宗乃乃和和款款は中中くははく程程りある通通く
雪雪ん海海乃乃をき山山里里とくく七七兼兼くハ解解くく
く是是雪雪の事事と人人守守て初初くは成成威威せり後後の正正
ふくも戦戦國國の中中は生生を村村は東東方方乃乃夷夷めく甚甚は
は勇勇猛猛の名名真真く叱叱咤咤の威威高高者者なく今今はふり天天
下下一二一二の大大諸諸侯侯と名名く甚甚は城城開開くも只只兵兵馬馬の力力の
くくあひくやくは守守りあも志志ありて誠誠
は文武文武兼兼備備真真の傑傑の大大乃乃くりあへく集集外外歌歌仙仙は

の武士ぶしかりけ人にん教しやう術じゆつの妙たぎと得とくてけ門けもん人にんとる考かうへい
 損とんと授じゆらるる系けい却せきおもひ損とんと傳でん授じゆしる人にん
 多おほしそ介けに戸こおろろを多おほく法はふ味あじも門かど系けい妙たぎ
 け段だんし進しん教しやう術じゆつの中なかは付つくま世よ間ま多おほくの奇き妙たぎの
 心こころ多おほくし信しんトうきまてもあふ小こ族しやく中ちゆうに
 て彼かの門もん人にんは親おや交ま交まとて修しゆ行ぎやうはあ、あしとせし
 小こ依い小こ威いずぶくたふとむしきまをけ段だんし進しんの父ちち祖そ
 ちや有あり也なり如ごと年ねんより教しやう術じゆつよかよあ日ひ夜や寝ね食じき
 とりて修しゆ行ぎやうせし一いつ夜や寝ね間まの復ふたと一いつ夜やの復ふたの復ふた



かね
 眞

武
 門
 人
 傳
 授
 損
 益

積氣と同一しと或ハ腫物ヲ押さるる一又ハ狐狸
 二魅せしる者ト云ハ一其外亦動目と發聲と程の
 知れざるものニ法皆一其の體の如く一又熊以先を
 の去集し其書も歌法にんくも人れそむ
 忍び入るんを其ハ内ニ寐入るる面方の小兒常ニ
 其父目と其以折悪しと怪しむ人ぬを
 小兒もよく寐入るウ門解く又討つんすも小兒
 常知れ其之の如く一其はけいハ折れざるなり
 是を殺氣の毎日の小兒ニ倣せしむ我其理の論ハ

格別先心未だ淨けし衣用わらざる事と感
 一又彼襖所持の者ハいふる強敵ニ逢討つる
 是と取事ナク又いふる極敵盜賊といふも此
 所持する人ハ其を存ていふと其は是ハいふ事
 小くが、ちりひるすやし尋しに何人かも口二四及
 の門人あり獲と受んと然し時先折れ約とさるる
 其其約乃辞君ニ不忠ナリ親ニ不孝なる
 一明女は信と多ふべし其虚言ハいふは鳥慢の
 かと起すべし次大酒をいふは義と多ふ處なり

公事ありはしむるに血をよそふに夜はまら
らば世に数く乃條目ありて去し是よりつてもかくこ
とありハ摩利支尊天の御討とせりて武運よき
と之初めよかくのこく物ふしとせりてけ辭よせむく
昔いよし人鎖英條示持もくくといふもそまらしなく
鎖乃手特とまふと定めより謀にかくのこくありま
正大乃物多約いし物軽き鎖多り聖人の道といふもけ
とや育つて定よ瓦通乃奥美といふ一法華經の水
火も燒溺もすすあてりて説き老子は虎豹も牙と

觸くる子なりと教へし心亦是よ外なるに鎖束の技藝
のよまらし甚妙なりむらくハ有難きこと多しと余
そ人よ交りて親しくせしむるは海とありて
まもあふきまや

丹後の人

奥州津輕の介は演は在りし弘永の役人より丹後
の人を尋ねるともと頻りにしゆ尋せし事ありといふる
は忠告しむるに津輕の岩井山乃神よ丹後の人成
長婦ふりて思ひても丹後人世に入る時を天氣

号しては淺くおても多くハ丹後入汝長く送ら出と事
かむら人乃恨ハ涼きとつや

幸の神

出羽國控免の譯はありの街道のあ方よ岩の譯を
正みち養正も方く必若より岩小志免繩と張り具
志免繩のよとに本まて細ユく陰董の形と作と道の
方ハむけく出ーありて陰董主又ーして長七八尺
むらゆとま之口又周へもあべーあゆりけーのぬ
ものあふの人よ若もハもま性吉よん紋ー名ま

本うくまの神と名けて毎年正月十五日お新
修の政むとてたら正社神乃事あまハ中々兼男よ
ハ廿夜まとい御巡是使又ハ御目附ホは御通の
も付すくま若まの、戲まホどにあり候ま
ま志免繩ハ紙と結びく多く付り是ハい
れと更がままハけあり江女ト配男とわりく
まふ紙ハ結ぶるま云津よ遠ま吉風のまあり
京都の今出川のよよりふのまの神とつやま
る林ままーあゆやまづ甲舎ハ色くの名ハ

あまきども陰蓋乃形の石陰門の取の石と神體と
 了所の氏神杯といけいありてたふとひかりつく不
 多し日本は古風よわ神代の巻たりの所或は管令
 の古事杯ゆきくといけいふる事多しは神道乃
 祕事よちかざる事も多しとぞおふ

屋氣樓

屋土乃詩文おも多くゆきく事とやする屋樓と
 りんごあり又海市ともいふ海とは屋をたぐくこと立
 のりりく樓屋城廓の形とありはく生中よ人馬



原海画

原海画

倉君の城甲のめりも是矣間かゝるにたもあはる
 う又皆するに松原のめく給ふある天の橋立なる
 中へまゐる一々もよほひ船あり一かきれば漸くは消
 去しぬるもかきぬるありありは山ありは終つて甲と
 隔つるも亦もよほひ城下の人も皆是知しなくとも
 何時よ給ふも是をぐうく又あはるは母もあふ人
 告あはるもよほひ消えくもよほひは世の事魚
 津を京の海邊乃人ハ例年見らる事かきとど二之甲と
 隔つるも地方の人を一生涯ほひふんぶる人多し余
 越中よあるも一時も四月の事と魚津よ遠るも

越中よあるも一時も四月の事と魚津よ遠るも
 一して登樓と見るべしとくよも是をよほひ余もあ
 事此の事なりとて山よあり一此も四月
 二月あるもよほひ四月の事と越中よ遠るも
 事あはるの事なりとて山よあり一此も四月
 一して越後よまゐるも越後津魚川よそ松山茂教
 よはるも成語の一ふけ人も系魚川乃海平遠る
 山の事よほひとて山よあり漁人のツヒ一も松山
 ことよほひの事なりとて山よありとツヒ一と海

一とれ余初見唐人乃作詩
 詩曰とくそ思ひ
 ち層樓ハ大洋ニありて
 陸地を絶入り海
 中をながきことの中
 に如降一が魚津の地
 理と云
 に在りてありて魚津ハ
 北海小島なる地あり
 一京
 の方七八里と云ふ程
 一能登國乃山嶺及
 井田の
 一又魚津の海ハ東より
 の入海あり海中より
 一陽氣向ふの山ハ映
 卜りて多くの形と
 又之向ふ
 一小島ありて數百
 ありて一なる大海
 一氣のなるといふも
 今ふの高きハ映
 ずるては

一一人の月見えと
 一海も二十五年の内
 一水ありといふも
 一又安藝國
 一氣も向ふよ山あり
 一水いさぎきり
 一たむけく世擲
 佐渡
 我が旅の付をいつ
 五戒とて道中記

の初よ太もすおける毎日その成るく聞くと
かろ其五戒と云ハ海海馮河夜行異食戕故之
是皆穢り乃人の最身とあやまら病成するの
ゆゑ之志ある人そ懼てまじくし海くあまし
今行くく長生と待くく我を佛とも成銘
一人は好い後世とあむしてとま之く五戒乃
亦も事くもよく公認て侵んゆくと之とも其
時よ隆く是はうそ天を捧はせハ取よふべき
公も起り川越くく母理の賢知をむげり
時

是是年の川何程の事らあるとも思ひ逢の
念せり人々ハ一日もても不感とろう人の地さの
志と云ふ下はせん事と新け毒よかりして
ぬまおとも等と下一旅海深きはまむくは
る病も女も一夜と変るかねとて時よあり
くもる兼く此かの外ふりくははつハ大ある
はる事くけあふ毎日小ぬき通中記よあ
かりとるべきも侵くく慎まへ徳るに然後
は海よあかりりりりるは三月八日の
が今

の諸般おんといへるよ今め是ハ越中より新妻より
一松軒といふ人けりしりけり松屋と逸事して舟
ははは旅中此邂逅かたぐさきききききききき
りやまき舟所より佐渡に渡りぬありよき便船
かきききききききききききききききききき
ふんやよき道遠あきばあききききききききき
んとすむむむむむむむむむむむむむむむむ
便ぬむむむむむむむむむむむむむむむむむ
之又日逸事き風土よアとの松と樹り不るる

おん何かおんおんおんおんおんおんおんおん
人よより空々々々々々松軒と松屋のそかりとの
おん荷物おん積りききききききききききき
うらまにきり浪風著く海とよ船のけりぬあきき
は月初出よむ了船と出す中よははは天氣おん
おんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
うんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
おんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
おんおんおんおんおんおんおんおんおんおん
おんおんおんおんおんおんおんおんおんおん

水もせよね成陸くかの事コトしつゝあつたけあつたけもさきなき事
 ありしうらひく船ふね乗りへぬ成あやううらひく入りま
 今もあまの海あまくく風かぜのうらひくあまの事コトはた
 忽たちらよ覆くわんんものうらひくあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 戒かい安あんのあまの事コトはた
 浮うき出でし申まをどもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた

其事コト公こう肝かんに刻きめぬ事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた
 うらひくもあまの事コトはた

ふしぬよふあふまゝくま浅き小限りちるる北海
浮くげ天氣よ逢ひいふ恙なく下りる浅水なる
あぬるも不思議の事しもよふては常あま
の佐渡もりの湊口ハ中時よりふたはた方一とんち
中時ハ佐渡乃ほり口の所をよハ繫華地から海
上も福とく総よ十八里と聞きたり又出舟時より四
里東北よ寺泊りしよふあり世亦も頗る繁華の地
かりの寺泊りち佐渡へ舟よをき地より十六里の海
上之けとあむいハ佐渡の海りよの湊け寺泊りこきむら

高桑大納言佐渡小配流の時世寺泊りは澤よ
下敷日風波又入るる遠年一好ひるる時け里の旋
如初君とソルとれあうらりハ初君別まど特
下和舟よしむをわたり今に所の中経乃も側よ石
碑よ彫舟一好ひる碑面よをよハおまひ越流の末乃
白波も之ゆる日れ有るくやまきけ好女初君ありま
ま為兼の如かかくさみくよありしを綾一花ゆも
限るふくやまきくもまばりて後よ玉舟集りも
入るるはらりり又日蓮上人佐渡へ為配流の時も

此寺泊りしと七日間風候待りひたるとして其難い所
 の寺もあまなり減れ越後小島とてむうとて鬼伝は
 とつひなるとし我等とて和洋水乃身たれも何と
 へき國とてあつしとてふるに島貴の方とて越
 後よとてに海と隔てると佐渡とてと左邊とて
 公乃内いりあし初君とて又とてに付てもとて
 おりいやりとて後とて張る波は如しとて

東遊記卷之三終

